



明治 22 年 (1889)

1893



研
習
志

研
習
水
書

如
之
人



〇 研 1



山
子
の
家
の
庭
の
石
の
燈
籠



道
邊
の
景
色

洛北舞樂の金祐禱る者甚多其
隨也者一井曰為の像人為建聖於此
表其遺跡可為今茲已也十月丁酉
ありて初佛人相謀修奈供佛歌
為事輯為二卷名曰閑古集取之
於海に佛引や余因波翁小は現
以圖其遺跡并卷首

明治廿二年十月

鐵齋德史百鍊



於芭蕉尾興り

脇起佛諸連歌

祖翁

夏まきいふをささけしうきよふ茶居る

よ我まよふせぬ夏の山は 楓城

おろろく虫のこのきしよ枝のしき 一菓

取らぬ一匹のかりき友とち 遊岳

手帝てはたものよ田のうきこの 九岳

凝せたる前絵の端も隠る 葉舟

名月の四々志々々々々々々々

九峰

蘇うるうううううううううう

洗玉

河着るも彼岸の流る流る

告語

今出る船と夢と夢り込

教島

近つきよせも互よ一京生世

栢年

うはううううううのううう十年

百虎

志あうううううううううううう

壽瓶

朝夕朝を念を垣志

梅権

夢也ら極も吹草も吉のを以

百髮

塔撒くちと雪能降る

落髮

裏町を護るも過るぬ冬の月

連梅

少化仲買能弱るああし

壽湖

のせ是と人るいんも運ハ別

瑞仙

志の字描しのように紀る屋

魚床

魚島よあけをいされとを巻り

苔笠

あふはははははははははははは

百峰

以影修子存裡の夢も愛も

美比良

茶のやうな滋味茶の如く

木立

屑買茶を心指麻を申り起

茶煙

お茶よ是れぬお茶又さ

幽亭

川崎の螺貝茶志きりよ等々

一燈

横濱より茶をとる習

芳雄

古き後ろくろく茶をぬ

花岡

海あつり海をせん 仲人

番月

冬載もぬをぬきし餅りつけ

碧

志く茶をちりりあふぬくと

並柳

紫漬も巾着も茶をぬき

柳意

めくら汁よち茶を 枝茶

花優

いさけん月よ自掃の茶を

吉柿

秋の茶耀り茶をぬき

花水

春日茶をぬき茶をぬき

柳意

茶のやうな味なり出さ

あやを

質入の多きよ箱を遠しりけ 雲峰

しりり息子能いふ傳よきる 右山

二二三の物せし難きを接しり 静起

そりよ日の浅る木蔭をくさ 雲雅

遠の出このを識る者のあり 梅月

いづつよきも命ぬせうら 文也

たらくとすままり草一冬ノ掛 凡痴

露く 露よちのこゆる月 梅教

海堂のちよつとさのき 初葉山 菖山

細工よちちりも 真 友 梅香

つ枝よちちりも 宮のそ 流美

ぬるみよ 清きよ 玉玩

山へけり居をほくくうちちの免 溪舟

老ゆる 伝父へまのむ言つと 毎友

是る空う 望みの星り〜お刺 刀 湖風

雨の甲〜と福 輝若くへる 雨名

鶴臺よ弓も塊もくまづ

朴因

舟波太郎の眼先もく

必是

新樹よもやせよもやせよ

秋野

麦海よもやせよ

楓葉

書生等も若のふりきり

梅香

天満あつと失ひ

双羽

くちくち宿の情の、忘る

出暁

咽ようきり

九堂

川の回も流の流もや

月更

やまもく波も

草石

良字く宗祇よ

仙草

貴もく宗祇よ

金砂女

所並の尾よ

稻俣

伐透もくも

井地

はらけもくも

湖亭

かよもくも

花子

身のうへをさへももつて涙くも

唐玉

くくく 神の長し短し

吳嶽

是あはれを子殺儀よちる

黄公

小春ありく事以後もあさむ

尖石

借よ来りて弱きをよめよまう

田子所

そめくをを捨てゆくのかき

蒼晴

甲しをる 浮山あをく月と星

子冷

嘯く中 乃 見古 黄鳥

素瓏

つや家の巨燈もやうとまらん

城曉

帆ぬしよこころる浦の己如く

臺

ちんまりと紫河原もなほ花よ入る

楓崖

小居ちりしとあひよねをい

昧月

知のふく牛乳を能のまゝ出来に

義石

婦りて降るまを 果ぬ月日

炭石

五州よ骨象の社もさしよるり

活島

夢よ控へて子もあると也

因也

母の跡をたゞに踏踏しては憚りの	茶造
やふ世の壁に遠くも福地	岩水
部を鼠柳のく作よ吹かす	巴橋
水よりうしそ漕名河変を	沼屋
り光の土産時よ更る月	原志
宿を——と戸を以て臺垣	安守
船のくし手すしふ人形と	月亭
傘講よ大舞うあさ	松野

さうさう峰のききの近き	浩翁
夢を消き福地吸壳	百花
宰所のあうくと亭のあや	長理女
そよひ変る世に河のう	梅屋
二百年花の葉を仰見	稻雲
ふちりも度ある六のそら	執草

七七

其二 祖翁

冬折也 母を以て色よ 風の音

〜〜〜〜〜夕如 幽雪

降りまづ馬の界場のよき色を 百俵

春風をよみ づい書を好む 孝暢

名月の嶺よ 茶水もある 初 鐵高

さく風の 芒穂をよみ 鬼楽

糖折もあま〜 春ぬ 田舎路 季元

年あつち 甘口 香水

ま〜 緑白粉を 濃くぬる 一白

丸中 糖子 拭込 阿多 玄記

箸折〜 洗心 糖の 新ら〜 寺町 梅屋

居る 西き さら〜 井の 白 尚細

市場 茶水 ぬるの〜 色く〜 治楽

家ぬ〜 せれ〜 言あ〜 春ぬ 柳女

山とあゝ美名とありー 喉拂 ちの女
 けくり如子 門子 解とふ 岩松
 峰ハ松 蕨 名の 咲りり ぬ志
 葉をくむ 名の 序り 葉のく 草

吾道書略 武花

山とあゝ今ハ 夜半の村ー 永機
 手折を おもハ さま む 時 採花女
 葉 居 鳥 鳴 山 の 名 花 の 形 石谷
 報 恩 子 古 人 の 旅 名 初ー 花 朝 女
 昔 あり 小 枝 中 終 末 の 海 花 の 形 無能
 昔 を 志 小 花 山 初 時 自 然 平
 うき 葉 の 山 花 名 初 時 自 朴 山

拾遺

二三年景也 拾遺の〜〜
 意〜思〜 意同 延〜よ 時白〜り
 意〜思〜 延〜よ 時白〜り
 時白〜り 延〜よ 時白〜り
 神笠の志 延〜よ 時白〜り
 志〜〜 延〜よ 時白〜り
 我を〜〜 延〜よ 時白〜り

巴橋 相臨 麓石 雀敵 卒志 流英 景呈

意〜思〜 延〜よ 時白〜り
 意〜思〜 延〜よ 時白〜り
 意〜思〜 延〜よ 時白〜り
 意〜思〜 延〜よ 時白〜り

月人 美家 南於 三河

加賀

意〜思〜 延〜よ 時白〜り
 意〜思〜 延〜よ 時白〜り
 意〜思〜 延〜よ 時白〜り

海宇 招層 文臨

十

尾張

初〜〜のれ終ふ事ぬ日なり
 都より此のつなきと〜〜の
 時より此のつなきと〜〜の
 枯る事ぬ終ふ事ぬ
 山幾重都をさ〜〜の時なり
 世より仰〜〜の〜〜の〜〜の

破面
 不運
 為尾
 二道
 秀不
 静愛

遠江

ちろ〜〜のふ昔如枇杷の
 味よまむ〜〜のや種
 翁高如この高豆のなり
 古道の奥あり〜〜の
 岩あり〜〜の
 鞍あり〜〜の

木洞
 意林
 因夢
 東海
 新水
 晴山

羽后
 嵯峨

十月十二日於洛水芭蕉庵建好

俳諧詠起連歌

祖篇

空屏の杉枝古しや冬ふそり

阿くし神よ 高き岩の鳥

袴着のあゝる今より夜く世を

一人あましく初より神出を

堀堀の像より月のはら

柳を明と暮と 柳をぬ

原志

巻志

志

志

志

おのつら市も深もあがりお

仕舞もく 時時知の顔

娘のうしろを人をもふ角目立

長山煙管もたもふ 嘯く

養生の神一我情よ風入る

音のめりも 短夜のみ

坊舎はら後く 磯よ打あがり

とんふ柳も 書字へそをぬ

笠

志

笠

志

笠

志

笠

志

連海く并舟初く後遠さ
 りしる又ふきり如晴あり
 備右の二物まきるよ滞り込
 毒のあしむの折戸のあく
 出代らま居るめうとい下男
 用又の折の用うまうう
 近きるまきりせぬるあり
 送るまきりまきり

志 志 志 志 志 志

沖崎のつねる頸城の雲松よ
 室の廣間より多々森の依
 双ふよ寝るまきりよ如まれ
 温海滞るるやうまきりあ
 水くまの海まきりあつみ純子
 嶺の痛しハまきり通しぬ
 川端能施系鬼能子月明り
 まきり片言のまきりまきり

志 志 志 志 志 志

遊物の西所三ッ里のちぢくさる

志

麻呂名安のさる大の字

笠

おとせをさるつゝもさるは麻呂の

志

さほふをさけるうちり生屋

笠

志らし来ぬ舞楽古村の巻の陰

志

ふきりーのほりー 疑を

草

近江

お字のち白をさるつゝもさる時る

竹若

いさほんおの情あのおるある

五楽

おと来る森耳よ踏る時るう丸

活島

志らさるや昔志らさる 松 笠

難友

手向さる遊江暮れはほい河の

巖石

いらさるりさるうおむや返る月

松風

いささくや時白よぬきー木の塔を

巖石

松を三人花のゆりき尾花うめ
 二百年のまのちつうのまのま
 ちくり井の時の鐘一箱水
 春合よう草ひし葉をま向うり
 日のひあまの娘まよ彼岸うれ
 見海をま淀山崎も若くせう空
 ままのまのまのまのまのまのま
 留まの戸へ花のりまのまのま

秋武
 鏡軒
 五星
 感目
 梅臺
 五瓢
 産重
 暇月

時のまのまのまのまのまのま
 是つまのまのまのまのまのま
 時をぬめまのまのまのまのま
 時のまのまのまのまのまのま
 是まのまのまのまのまのま
 海をぬまのまのまのまのまのま
 まのまのまのまのまのまのま
 時のまのまのまのまのまのま

五瓢
 紅友
 地葉
 五瓢
 十方
 玉光
 水亭
 彼蒼

時をくまの清き流をな 蜀水 峯月

雲のくまの松を 冬に梅へり 九堂

豆腐屋の清き流をな 枯尾を 吳嶽

但馬

雲をある雲に 出をあり 枯をを 静湖園

時をくまの松を 冬に梅の 龍溪

冬に梅の松を 冬に梅を 梅光

白くくまの尾を 冬に梅の 口元 物菜

祖翁

雲をくまの清き流をな 蜀水

雲をくまの松を 冬に梅の 峯月

豆腐屋の清き流をな 枯尾を 吳嶽

雲をある雲に 出をあり 枯をを 静湖園

時をくまの松を 冬に梅の 龍溪

冬に梅の松を 冬に梅を 梅光

白くくまの尾を 冬に梅の 口元 物菜

高きとおぼろりし煙

煙

西横煙を積る降る

煙

高きとふきの煙

煙

重宝へ扉はしめぬを別

煙

高きととれとあくふく

煙

月夜しくよ伸る

煙

風ととふ風の音の遠きより

煙

軽よ肩たつまる

煙

高きとと燃る松を燃る

煙

枝の先より音

煙

高きと鐘と都の音

煙

餅が音

煙

おぼろちと遠きふ

煙

たふ及とぬあつの子

煙

高き煙をたふえと

煙

名よりと煙き天の

煙

十一

十一

煙

背戸只引ひけりあけ雪の裏

男まきりふ波剝け素

形うまうもの悟業もあはし

窓の神またえぬもの灯

お松船の板子も攪りり

悟き物お祈りあり

寝あきの泣きつける雪の月

垣おま様のせんくうよ咲

煙 文 掃 亭 文 掃 煙 文 掃 亭 文 掃

人ら〜、お集り葉山よのをり

片屋の鳥よを清り梅

ち〜〜〜〜お後し

中〜傘もふさぎぬ

さよ〜よ昔を〜〜〜

中よ〜遊〜〜〜

煙 文 掃 亭 文 掃

越后

都より津彦傳あまのこし〜
 ありし神さつりぬ〜
 年〜よ町る〜
 あま〜
 思ひ〜
 子〜

尤儀
 物埃
 乙江
 様風
 鹿角
 帯角
 調子

濡き〜
 仰る〜
 能登

斗月
 晴雲

翁〜
 弥生〜
 何れ〜
 丹波
 おあ〜
 浩島

淇池
 生あ
 暮出

五九

夕のりあふきこむ向う枯柳 花園
 解よとくくわくやお葉よ夕時白 溪舟
 夕のりあふきこむ向う枯柳 花園
 解よとくくわくやお葉よ夕時白 溪舟
 夕のりあふきこむ向う枯柳 花園
 解よとくくわくやお葉よ夕時白 溪舟
 夕のりあふきこむ向う枯柳 花園
 解よとくくわくやお葉よ夕時白 溪舟
 夕のりあふきこむ向う枯柳 花園
 解よとくくわくやお葉よ夕時白 溪舟

名のみたうきく廣う山路う丸 芦山

伊豆

海をみく果ふきさの町白葉 連水
 町をみく果ふきさの町白葉 連水
 町をみく果ふきさの町白葉 連水
 町をみく果ふきさの町白葉 連水
 町をみく果ふきさの町白葉 連水

田端

月の雲をみく果ふきさの町白葉 雪牙
 月の雲をみく果ふきさの町白葉 雪牙
 月の雲をみく果ふきさの町白葉 雪牙
 月の雲をみく果ふきさの町白葉 雪牙
 月の雲をみく果ふきさの町白葉 雪牙

三十一

仰く日如きよ今年の初〜を 西岱

志く〜也柳よ〜風の先 八意

〜〜也仰げ〜権の布 兼堂

播磨

露も新よ時るよ鷹のあ〜かきり 小後

今よ〜流きを汲也昔法よ 宝岳

志く〜〜以〜殊よ二百年 小梅

豊前

阿〜等如二百年忘の時白雲 瓢舟

古池よ〜〜〜清〜 秋の水 白鳥

暮き〜字の〜〜也 塚北霜 関月

そ〜〜〜也〜〜〜葉の影 兜衆

踏ふ〜志を如枯竹の寂葉り 孤遊

年譜よ友のふ〜〜也時白の云 兼演

諸人よ〜〜〜〜〜〜〜〜〜 小夢

見〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 翠煙

三十一

冬の空も赤き 海やうや 霜 水 梅 月

開きけり 空もく 廣き 枯れぬ 氷 果 水

枯れ 枯れぬ 志もく 尾もく 雪 未 曉

曉しき 雪結露や 雲 居 雪 曉 露

豊后

冬もく や 昔の ちもく 過る 音 春 音

伊豫

仰見もく 空の 遠きよ 月く 嵐 雲 居

半一箇

徳前

薫よ 秋葉の 色対し けり 春 玉 笠

徳中

空もく 空も 秋葉く 也 時 白 雪 春 園

雪もく 空も 甲斐 空も 秋の 初 時 春 園

空もく 空も 也 昔の 空も 秋の 初 時 春 園

阿波

春もく 空の 空も 秋の 初 時 春 園

九月十二日於松栢會張行

祖翁

あろくくま山崎ちまの 遊の音

とまのま 枝の音を 語ふ音 一葉

汁錫をふききあかせる 煙よあけ 船雲

葉振しー 塔りまー ち利 葉舟

あつる 月よふ 是るぬ 宵のり 九峰

垣州とありうさしとある 雲 雲

無縁やら 施徳鬼のあふの 控えうよ 葉

河を問うるもうま心 返 答 峰

とせ 程よ 何を 焚さぬ 約よ 舟

頼りありも 恋るさめら 葉 葉

風形引そ 好ま 徳もいー とも 雲 雲

あろくー 生美のよふ 喚りまゝ 舟

空梅のちよつと 冨きー 着戸の口 峰

月あり ぢのら 雲の けけ 雲の 雲

あつくとつしはをき五十餘川

流るるまゝ清く学申る

是の奥峰をきくも峰さうよ

若く空法のこのさくさ

龍のさ烟子のむうり河他もさく

海系とのむも古ふりくさ

逆巻の吳人も志をぬ走り元

杉原まゝの突ぬ帯の家

兼

峰

舟

変

兼

舟

峰

変

梅場の屋出よりく極中流

生きてまゝの黒い以佛

流り眼をうたぬはくハ流る水

是をぬ悟業をひき業

志をきく鏡舟を帯の間

くまをくさうや降ぬ土山

海流の狸りしむむ舟月夜

霧のまゝと別志のまゝ

兼

峰

舟

変

兼

舟

峰

変

三十一

三十一

左被夫亦りすへりあはらるる
 三年ふりよ善徳うこつ
 めつとらうよ増の馳走をさるる
 ちあぬいさきよきまに成せぬ
 ちつらき物名何うり是あれや
 あききききききききききき
 身 変 業 舟 峰 業

周防

仰々々もあきくもくも月とる
 茶のちや葉世もよ波 菊 水
 神しあるるよよ山の志くをう丸
 枯る世も芳もく一霜 水 菊 州
 歳よりきよきくを也 塚の嶺
 昔言く 雅も 時も 言も 言も
 初雪也 塚も 言も 言も 言も
 蕉 蕉 枕 石 三 樹 湖 崎 竹 舎 素 友 一 光

志多しき昔也 塚の枯尾也 粟多
 玉蓮や二石の露よ 冴あさる
 陸崎け池も小毒の日水甲うみ 嵐石
 日の光りとも少ぬ 木の葉のるのうへ 青梨
 世よりとる言の葉也 空急佛 岩苔
 清きさぬぬやまも清水の細流を 龜友
 二百年すまると 汗や小六月 洞古
 春の時のさあ〜〜さの重〜〜りれ 石野

下総

葉時の逢〜 古しと 枯 笠 旭島

淡路

春よとらうの時のさあぬ 家の春 梅雲

土佐

一とちの海也の清〜 枯尾也 花野

肥後

言のさえとら〜のさ〜 枯 芭 松花

黄 濃

其様なる草なり〜也〜其尾は 黄 庭

雅う本志〜也〜其尾は 黄 庭

〜其尾は 黄 庭

〜其尾は 黄 庭

〜其尾は 黄 庭

〜其尾は 黄 庭

〜其尾は 黄 庭

水〜ぬい波〜 堀の子向 水 雅堂

亡き後の名も 埋せぬ 枯尾也 延 有

〜其尾は 黄 庭

二百年 昔を 字也 起り〜也 黄 庭

定め〜也 世よ〜也 何し時の云 懐 菊

子向〜也 其は 類つ〜也 其尾は 黄 庭

ありし也 也ハ 堀山崎 秋の 黄 庭

草の 治平 小 蘇 楽也 其尾は 黄 庭

黄 庭

沿石のさきへ 芳を吊りて丸 当熟仙

恩の懐きくうさよき夕々 風 東湖

祖のその海を味ら 代々経る 漢水

通あふの歌は空を 一々を 風子

二百年聲りを 信々よおせ丸 喘風

柳々々 芳忘せは 己を丸 咲 野翁

信濃

古よりあつたいささき 時をうら 省我

上野

昔ふもやあふおの 神々丸 葉古

そら廣く せうぬ尾もあ 柳々々 知雄

手向より 年々 ちの ちの 乙瓢

甲斐

柳々から 名の 高う ちの 尾を 魚白

石見

手向より 粒々 時をうら 梅元

越前

いゝ急いものぬくさう様一 抱火鉢 晩秋

時を暮る夜や 孫もはらねの 籠 小舟

志のまじりて 空如 時を暮るのや 杖の 蕉竹

何勢

一 時うまきと 如く 空のあはれ 雲 耕田

書告

お山の方あまき 夢り 志く 雲 祇年

八月十二日於養真館張行

昭題和洋俳諧連歌 祖翁

常あまのり人 小年 夢世初時を

破 忘 覚ニフ 寒ノ 生一ラ 告徳

出しつけの 船よ 燈を あらをせん 一葉

群 多 息チ 飛 鳴ス 婚交

あつめよとくましく 雲に 影 影え 遊岳

芝 蓉 花 漸 清 菜

三十一

秋をむ寐しは好の立脚

媒 酌 今^ニ 暮^レ 定

溪 泊 猶 有^レ 情

只^ウ 向^キ 長^サ の 裁 判

香 田 風 始^テ 平^ナ

思^ハ の およ 故^ノ 處^ニ 自

逢^フ 一^ニ 存^ス 裏^ヨ と 裏^ト を 見^ル 逢^フ

威 泣 輝^ニ 帝 京

兼 岳 変 兼 臣 変 岳 臣

閑^ク 心^ノ の 名^ニ 運^ス 動^ス 兼^テ 心^ノ

亦^シ 紀^ス 了^ル 事^ノ 是^レ 多^ク

花 深^ニ 忘^ル 帰^ル 程^ヲ

夕^ニ 暮^ル と 暮^ル 庭^ノ 空^ニ

字^ヲ 解^ク 自^ラ 心^ノ の 重^ク の 内

石^ノ 間^ノ の 清^ク の 水^ノ の 臺^ノ 石

得^レ 蟻^ヲ 拳^ニ 震^ル 名^ヲ

う^ラ う^ラ と ぬ^レ 人^ノ の 陰^ノ 云

兼 岳 変 兼 臣 変 岳 臣

あゝ去年の頃より糖

糸 燗 滅シテ 赤ダ 明カサリ

常盤木よりある。夏の青さ

迎レテ 神ヲ 酒 頻リ 傾ル

桑あまの袖くまを噴き着る

河更く遊しより竹の山あり

月 閑ニシテ 似ニ 鬼 形

露 満ナテ 如ニシ 水 晶

岳 変 葉 岳 変 葉 岳 変 葉 岳 変

夏科と字の新書表よりよく

却テ 忌ル 價 値 輕キラ

藤あゝと数と手拭移りあり

乞 巧ニ 巧ニ 漢ス 兵ヲ

冬の暖あゝと露のたふしき

ぬゝむ井あまうり 竹

岳 変 葉 岳 変 葉 岳 変 葉 岳 変

駿河

お山や々々時々の林々の 青江

北山や〜〜〜高き所の岸 眉泉

あき

二百年の昔も〜〜お山を〜 花風

出雲

お山や々々〜〜のお山 出川

陸奥

ぬきまをり思ひまをりお初時向 十方化

海を渡りまぬき向やあの日 逆調

里芋のおを洗う〜 翁 老楽

猿まけ自し〜〜やあ〜〜 似壽

常盤もあま濃き塚や初時向 久松

あ〜〜やあ向る草花穂先〜 東英

草花せりあ〜あ時向る塚のお 素光

素光

時を去りぬ時を去りぬ只ありは 芳新

菊も去りぬ菊も去りぬ白の庭の松 貞光

岩代

皆神をりぬ時を去りぬ 桑月

めくり来りぬ時を去りぬ 愚山

さ波也雲津の原は夕 又彦

清りぬ松の庭の雪 一笑

河の津 宮の鳴る時を去りぬ 一楽

小春日和神の笛を六思をれを 鴻橋

蝶も飛さうと小春の花を去りぬ 露崎

山麓を去りぬ雪の空を花の影 庭歌

空を去りぬ小舟や小六月 雪雪

小春日和風さうと小春の月 蓮史

峰も去りぬ雪の空を去りぬ 親月

夢も去りぬ雪の空を去りぬ 算生

去りぬ也 蝶も去りぬ 小春 伴著

水うきくく外をくれう水 水左

雲水

水仙やうけくき山の麓 朴田

和蘭二百年忌遥拜

英濃國岐阜市於石共庵能諧連歌興行

手向願起

うきうきうきうきうきうきうきうきうき

旅の舟の音を 澄く 共清水 磯く島

舟くくくくくくくくくくくくくくくく 七舟

桜皮くくくくくくくくくくくくくくく 悟高

和蘭きれく病船押へくあくくくくく 和石

歌よみ人きまら 宵の月 舞英

秋風の琴ありるき 松水 律 悟石

葉山より水くくくくくくくくくくく 百川

右八句表

和蘭

山城

きしりきしりききりありやうれ
 芹舎
 山の空なるうへりきくを
 連梅
 値くとも梅雪の露を所供よ
 梅麩
 仰見るもふれきききききき
 梅意
 は末も手回ハキキキキ
 壽籠
 木の度お月も昔の秋水色
 函怪
 結ふもきききききききき
 梅典

空雲お眼よーむ翁水りり
 素山
 冬空のありきききききき
 一白
 きよ波舞もけりきききき
 梨毒
 水つりや昔時中一鹿の壁
 子合
 山の井水度よ昔の本水塔う丸
 梅意女
 秋葉のうきかのおよよ松尾む
 秋理
 末はも結ぬ翁はきききき
 英塔良

竹のりあをそよゆせ初〜〜風 青梯
 ぬも〜葉〜忘〜〜とよ時るのよ 田子町
 重〜〜湯〜〜ぬ〜 ねのあ〜 屋煙
 つま〜も朽〜枯〜竹〜夢の記 幽亭
 苔〜〜仰〜〜墳や 夢の紫 湖風
 踏〜〜ゆ〜〜ゆ〜 夢の葉の白〜ゆれ 獵仙
 今〜〜初〜〜ぬ〜 枯〜竹〜を〜め〜る〜 夢 蒼岫

うりおの時るよゆ〜 霜の日 雪峰
 雪〜〜根〜〜ふ〜〜〜ゆ〜 枯尾む 安楽
 雪〜〜よ〜影〜〜を〜〜ゆ〜 夢の月 乾中
 清〜〜〜〜〜〜 廣〜ゆ〜ぬ〜 霜 峯石
 水山のふり〜〜と〜かり〜ゆ〜ゆ〜 時る 溪石
 ぬ〜〜を〜あ〜ふ〜〜 石年のふ〜〜れ 湖舟
 枯〜〜〜人〜〜根〜〜志〜〜毎〜〜き〜尾〜む〜ゆ 松野
 夢〜あ〜を〜む〜ゆ〜ゆ〜 月の光り〜ゆ〜ゆ 長水

見よる如きの紫あけく鷹の屋根

おもしろくも向やうのたう時自

世よ光るふくの紫もや雲の花

山麓もや〜〜を降る日を物自

ゆきよ〜し〜の時の自の一合り

あ〜〜や枯も考ぬ子の種

古池の産光りけり冬自

鳥丘

月亭

仙学

魚水

梅傍

梅香

花首

あ〜〜き〜の如也ま〜時自

茶のまやけを喚く人のけ

あ〜〜や翁のあ〜の苦情あ

松亭〜鷹の産光り〜れ

一対のあ〜〜の月夜丸

雅座〜青も〜向の〜り〜

引板の青も〜能〜志の〜

春雨

月交

百叟

百峰

百虎

一燈

梅屋

枝のあゝけいたしーの也雪の危 臺

結ふまゝの時をさゝきよ 霜水 霜水

耳のまゝを掃よーしむ時をうれ ^{音所} 梅屋

今来ぬ團炉裏也昔懐しき ちの女

松一本おとと息よ高き枯のうれ ささ女

碑の苔ぬらうーき時をうれ 又也

海に花をたたくかーくちのあ危 美峰

松風をむのーのきよ枯雪原 築山

澄切き音あつーき清水のうれ 音鐘

そららーきやち時をうれよふ手向 魚乐

時をうれね也雑案を煙よ焚き 芳煙

はらうーきおをさるるの始うれ 黄公

手向よーたれも枝あつるをちうれ 双羽

時をうれ也縁まを向のぬれ音 東倉

月雪の度よ重なる光りうれ あや城

万年をわたりて深し松の時
 子向しるおよおし里ぬ神の時
 恒舞し宿あそよる能霜の時
 冬枯るもももれを菊の時
 折るももあまも宿のしを
 しもくく降るも向う夕時
 めり其も菊時ふ日時しを
 更なり月影空し松尾を
 嵐子 松尾 菊 玉 毎 是 嵐子

冬之ぬおぬあしりも今も松
 際より其も大向を之蘇の時
 折るも其も菊の時ぬあしり
 いちあそを折るも二百年
 万降るも麻舟を免を芭蕉の時
 清くあふ流其時し松尾を
 朽るも人答其折るも梅の時
 見あそよあまも廣も菊の時
 松尾 松尾 松尾 松尾 松尾 松尾 松尾 松尾 松尾 松尾

日向を長き影の如く照らす
 黄き花の影法師を——よかんこ
 海を渡る空を——冬の月
 波を——あまうらも秋の空
 水も——あまうらも秋の空
 秋風の吹くよるを——山の水
 空を——計りなき秋の空
 葉を——あまうらも秋の空

岩松
 琴水
 蟬地
 柳百
 秋水
 群芳
 雪唯
 叶

古川の流を——浮ぶ——くせう水
 表圃

協同へも——毒の美あり——秋の風
 草の——きりぎりすよめせん
 花を——秋の風を——きりぎりすよめせん
 隊を——甲斐の山を——魚の音
 系を——尾の——きりぎりすよめせん
 秋の——きりぎりすよめせん

尚細
 唐元
 重楽
 重楽
 鬼乐
 又堀

三十一

跡をくゞり及も子等の夕の葉 六糸
 海に破ふ草もきや秋の山は色 あり廿
 見あやうよる鹿あつりや若の春 玄記
 春もあもあうりや甲のき時白の丸 清水
 立るくさゆも年代あり 篇 俗楽
 志くもや船も通うる鹿古 くと栗
 相う校よ月さうりさ心相くくせ せん富
 子を控え見さうり古のいみち集 吉飛

東る年の困り為うる年の誓 子成
 春くや果あもき松野うる尾む 春暢
 古の秋暮もさしある竹養う丸 致為
 尾を控えささる白のき松和う丸 梅権
 年古き松を時るのやうりうの春 春出
 古の松を控えくくさる小あう集 栢年
 澄切と井よ影とあを松尾 是 露葉

大比叡の影をまじりて庭やうき尾を
 揚生も遊しむわの〜は〜〜れ
 し〜つ〜めをぬ顔や〜初時る
 ちつ〜きまの山も水もま〜〜
 うき〜〜人影定まき尾をうれ
 度の子を最葉よ寐〜ま〜時る
 写さまの耳垂珠ま〜衣時る
 旅よ寐〜夢も申の〜や〜ね〜〜
 夢湖
 友月
 井蛙
 高月
 玉柳
 碧〜
 茶造
 夢湖

帯を〜ぬりふのり影も枯尾を
 野〜〜ま〜秋初揚〜〜初〜〜
 時〜〜やあ〜ま〜〜ま〜幸福古
 年〜〜〜庭井のあ〜夕〜〜れ
 以〜〜〜の程あ〜つ〜〜初時る
 菊も也影志〜ま〜〜ま〜松 笠
 梅〜の舞りもあ〜ん〜小春 証
 お〜い〜る〜ふのあ〜つ〜〜〜初時る
 百穀
 初葉
 初露
 楓葉
 無所女
 水睡
 露玉
 楓唯

枯きまゝ新多し一のこ糸蔭
 凡痴
 のきまゝ新多し一のこ糸蔭
 静起
 竹のきまゝ新多し一のこ糸蔭
 柳暁
 月星を新多し一のこ糸蔭
 花蕙
 さやまの月よされ金糸尾を
 花水
 新多し一のこ糸蔭の月よされ一のこ糸蔭
 静寂
 新風や新多し一のこ糸蔭の月よされ一のこ糸蔭
 玉如

北山芭蕉庵二百年遠忌よ 楓嶽

澄澄と古井つらつら 州のこ糸蔭
 露環
 冬を隣よちをき虫の音
 梅橙
 昔の月星を新多し一のこ糸蔭
 梅橙
 口よまゝ新多し一のこ糸蔭
 静起
 携を中へまげき裾ふ二れ新多し
 凡痴
 まゝちらつくと淡雪の音
 琴湖

和歌

被岸お目しを携むをら立 藤造

ちうつと五七把きふ引 碧了

横向き風吹方へうきを袖 直極

まをくハ通へぬ中と去る 朴因

糸おりの漕みみくせし庭の面 楓唯

る乞さるうー白川能月 来出

ふれ浪よ集くく船を強う之 霜月

中おしあき 犬のふれ 乾 雪砂甘

たらくまよ遠玉出を要右郎 州局

まをつあやまの漢くくの鶴 楓葉

石も層も短うおりふ色さゆり 拓年

やまをくくあゆる毒の山坂 初笑

葉をくく乙女のみさふ葉庭 露翠

猿梳あらし葉くの口まあ 凡病

布粒のく神集もまよ造る若 静起

安政山刺 静心 方 友 栞 雅

和歌

梅はさかたはさかたのあまのり

彦湖

あまのりさかたはさかたのあまのり

楓城

あまのりさかたはさかたのあまのり

采女

あまのりさかたはさかたのあまのり

菫蓮

あまのりさかたはさかたのあまのり

露月

あまのりさかたはさかたのあまのり

楓城

あまのりさかたはさかたのあまのり

朴因

あまのりさかたはさかたのあまのり

碧々

あまのりさかたはさかたのあまのり

彦湖

あまのりさかたはさかたのあまのり

彦湖

あまのりさかたはさかたのあまのり

楓城

あまのりさかたはさかたのあまのり

彦湖

あまのりさかたはさかたのあまのり

出惺

あまのりさかたはさかたのあまのり

其福

遊東三郡

峯つらぬ板を更さるる如以蝶元 見 一花
 合さるるよお紫ちり暮るる云武化、香名
 世よ光る露の草——枯尾花、南一
 自さるるを神もぬる如時自命 固 幾年
 志くもるやむのちかしの松花者 何勢 虫
 耳よるる風や時自の先を—— 三才 若山
 志くもる如松花よられを夢のあと も 梅宿

雪の菓のゆやとり本と華より 京 集和
 系群と山吹花さるるうね、我重
 二百年さるるくふの時自か、身心
 昔もや 母后 愛月
 ひと嵐松あやあやや散る系、奴屏
 松ら耶や月ハ隈あく思ふや 陸奥 厚袋
 時自もや 大坂 是誰
 作らるるや日の思ひ明花松尾系 大坂 岱逸

だらう〜き〜山や細〜れ 能作 乃之
 筆のまふ出〜り眼鏡も掛〜り 近江 九洗
 折〜し〜た〜の〜手向〜し〜む、一枝
 拂〜し〜ふ〜も〜る〜一尾の雉、九川
 傍〜し〜く〜を〜道〜ふ〜る〜木〜の〜ま〜が〜、一世
 二百年強〜く古池のま〜れ〜うか 伊賀 垂々
 影向のま〜し〜れ〜る〜ま〜と〜ま〜や、苔似
 筆〜ふ〜れ〜ハ〜志〜と〜述〜は〜く〜さ〜ぬ〜十二日 越後 旭扇

○

都〜方〜又〜志〜し〜り〜ふ〜の〜ま〜を〜蘇 稻妻
 暮〜々〜如〜世〜の〜の〜時〜を〜ま〜を〜 九峰
 硯〜も〜交〜々〜ま〜々〜の〜し〜 九岳
 暮〜々〜お〜時〜も〜し〜 洗玉
 夕照如雲〜も〜の〜ま〜の〜し〜 遊岳
 筆のま〜ふ〜り〜ま〜の〜し〜 石俵
 志〜ら〜り〜と〜降〜も〜る〜 紫舟

澄きけり月も水も也 菊水 告後
 秋の山菊水の水清き可那 如露
 秋風よけを志のみのま向州 鐵高
 ちつりき 庵如 町るも二百年 岫雲
 庵のなきも 庵るも 向の那 一葉
 町るも 庵の那 庵るも 木城

明治二十二年十月

芭蕉翁二百年大速諱豫修二夜三日法事

南禪寺僧衆拜請

金福寺

修行品目

十日 般若心經 法華經六ノ卷

首楞嚴神咒

同日 歌仙興行

十日 觀音懺法 三陀羅尼經

首楞嚴神咒

同日 手向吟上

十二日 大悲圓滿無碍大神咒

拈香 有偈畧之 法華經

首楞嚴神咒

同日 正式俳諧百韻興行

床

翁肖像 贊四季句

蕪村筆

左 燈火 燭臺青磁

中央香爐 青磁 香銘念珠

供卓根來朱平上

右 芒二野菊 花生青磁

文臺 末松山松木 脚阿武隈川埋木 天明年百回忌之節 新調傳記百池

硯宮 松島松木 画 蕪村筆

文臺 二見形 重硯 海松二蛤画 同 筆

座香 塾風

宗匠 服宗匠 執筆 香元 知事 座配 楓城 稻慶 遊岳 松鶴 一巢 百仙 葉舟

○芭蕉庵床

翁木像 左右中央燈花香食

芭蕉庵記 蕪村筆

○

展觀之部 寺村氏出品

翁真蹟 閑古乃画賛 一幅

全 信夫摺詠草 全

全 枯枝句短冊 全

其角筆 短冊 全

嵐雪筆 全 全

蕪村肖像 月溪筆 全

香爐青磁 春日盆二上

蕪村筆 俳仙之圖 全

全 辨慶画賛 全

三老人之圖 蕪村 田福 月溪 士朗 合作

并二書筒 百池 曉臺 定雅

其角筆 丈草宛書牘 全

短冊帖 先哲書數百葉

○詩仙堂三展觀之部 三井氏出品

左 澄舟也 其角

中 さみれよ

翁 三幅

右 やく涼

嵐雪

あつゝの

可笑 大石良雄

里幸

業清 不破数右門

このまへや

利方 矢頭長七

五月るよ

昭定 間 十次郎

釈迦既死

招齋 神崎與五郎

花よ跡債

素合 堀部弥兵衛

蕉たつ

悦貫 小野寺十内

あつゝつて

常牧 武林唯七

あつゝよ

一旦 間瀬久太夫

くろあつゝ

其角 寶晋齋

右十幅對

それるハ

鬼貫 一幅

花のこぎ

翁 全

おちぬきのしき

高原遊女

ゆきよて

同 大和 横物 一幅

ゆきよて

其角

○圓光寺ニテ諸家出品之部

尾上金

芭蕉翁所持 一箇

芭蕉翁像 蕪村筆 一幅

芭蕉翁書 全

其角短冊 二幅

其角嵐雪園女画賛 鬻太画 一幅

半柳留別画賛 全

其角猫ノ子画賛 全

四福人画賛 獅子老人 全

芭蕉翁書牘 松風宛 全

大高子葉三節ノ句 全

芭蕉翁唐崎ノ短冊 全

全葺猪ノ画賛 全

嵐雪九月巻ノ句 全

野坡自画賛 全

蕉翁五月句也ノ句 全

芭蕉忌表六句支考書 全

蕉翁尚白宛ノ書牘 全

嵐雪朝顔ノ画蕉翁賛 全

蕉翁夕フトキヤノ句 全

土芳百負巻物 一軸

其他数百品有之 下 雅王 継奉 二 関

セサ儿物ハ略之



詩歌連俳書画摺物 印刷者

京都市四条通山旅町

湖雲堂

馬場利助

